

所の満人を呼び寄せて、「高田家の家財道具みんな分配して仲良く暮らしてください」と言い残し、避難する。

第二部落は全員自決していた。開拓団から五常まで団員の長蛇の列。一週間ずぶ濡れになりながら五常までついた。途中、暴民から襲撃をうけ略奪、暴行に遭う。全く着の身着のままの非情の状態で五常に一年余の生活をする。

二十一年八月から引揚げが始まった。病気で動けない人、子供をおいていく人、主人が死んで母子ともに残留する人、本当に地獄の中から引き揚げた信子さんなのである。五常からコロ島まで四十日以上かかって博多に着いた。この四十幾日かの引き揚げ途中、毎日毎日亡くなっていく人がいた。

御主人の高田氏は満州で召集し、九州に戻り、終戦を迎えたので、一年以上も家で心配しながら信子さんの引揚げを待っており、喜びは言語に絶するものだった。

現在老いてなお、御主人と信子さんは幸せな生活を

送っておれる。「人に与えるときは心身から湧き出る淡々たる気性」の信子さんである。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

苦しみの中の最高の人生

富山県 小 桜 トミ子

私は下新川郡入善町新屋の農家に十人兄弟の七番目として生まれ、幼いころより体も小さく、小心者でしたが、親兄弟思いは大きく、勉強、家の手伝いは親を安心させるためがんばったつもりです。両親は子供に對してとても厳しくまた優しく育てられ、兄弟げんかをした記憶はありません。学校を卒業すると我慢強い人間にするため、親は会社に勤めをする前に必ず他人の家へ奉公に出しました。私は東京の個人会社で十八人家族の家事一切のお手伝いに行かされました。

昭和十二年、父親が亡くなり、帰ってきて初めて入

善会社に入社しました。奉公させていただいたお陰で苦勞もなく、両親に感謝しました。父が亡くなって以来、子供がたくさんいるため、母は嫁さんに遠慮するようになり、私は親、兄弟思いがつのるばかりでした。

そして十九年暮れ、母は米山家へ嫁ぐ話をもってきました。私は考えることなく親、兄弟のことを思いすぐ返事をしました。満州開拓団に着く日がきまつているので、式を上げる間もなく十二月二十九日入善駅を出発しました。

下関で船に乗り動き出したとき、駅で別れたときの母の寂しように涙ぐんだ顔が初めて目に浮かび、かえって親孝行のつもりが親不幸になったのかなあーと思い、胸がきゅつとして涙が出ました。下関から釜山の間の玄界灘を通るとき、万が一のために浮き輪が渡されました。いよいよ玄界灘に近づいたとき、皆甲板に上がった。船が進んだ後の海上を見ると餌でも撒いて進んでいるかのようにたくさんの魚が後をついてきた。遠く離れた所に大きな鯨が時々尾を見せていたが、心配していた玄界灘も無事に通り釜山に上陸すること

ができました。

釜山から汽車に乗った。初めて見る朝鮮の建物、空気が、特に女性の服装があざやかで、外国にきたんだなあーと言った感じで夢見ている気持ちでした。

ハルビン駅で下車して駅前通りを少し歩いたが、寒さが日本と違い寒いと言うより痛いと言った感じでした。私は標準服に下駄ばきなので二、三步歩いてはすってんすつてんと転ぶのと、日本人の服装の女が珍しかったのか、姑娘こわい、姑娘とまたたく間に満人たちが集まってきたので、すぐ駅にもどり汽車に乗りました。

満州の汽車は日本の汽車より高さも幅も一回りも大きく座席も三人は楽に座れる。汽車の窓から外を眺めていると、山も森も建物も見えない。ただただ広い銀世界の真ん中を走った。乗ってくる人、全部満人ばかりで、見るより見られている方なので、変な気持ちがありました。

昭和二十年一月四日、憧れの大陸、成吉思汗駅に着いた。義勇隊の方が迎えにきて、荷物を持って奥井先生の家へ案内してくださいました。先生は頭道班の家

の壁がまだ濡れているから、乾くまでゆっくり休んで行きなさいと言われ、二週間お世話になりました。

親元から離れた寂しき、その上、寒さが厳しい。とうとう風邪を引きトンコン病になって、扎蘭屯の病院に入院してしまいました。

頭道班には富山の鍋島さんと、新潟の阿部さんと三軒で一部落でした。畑もお風呂、便所、井戸もみな外で共同でした。広い広い土地一面に生えている洋草を一年間の燃料にするため刈り取りもしました。春になり暖かくなるとその土地一面に迎春花が咲き、その後バラ、白百合、桔梗、芍薬と色とりどりの花が次から次と咲き誇る。日本では想像のつかない所で一日中窓辺に寄りかかり、のんびり外を眺めていると、毎日のように満人は飴をいっぱい担いできて「姑娘、飴、要不要」と売りにきた。かわいそうでくるごとに少し買って上げると「姑娘、謝謝」と喜んで帰って行く姿を眺めていると、大陸ならではの風景できてよかったですな。あーと幸福を感じ、夢見ている心地でした。

満州にきてあまりの幸福に、つい内地の肉親のこと

も忘れかけようとしていたところ、五月七日、突然、豊秋開拓団に五、六人の男の人を残して主人にも召集令状がきました。

女たちだけで頭道班にすることもできず、全員本部に移りました。本部には牛、馬、綿羊、鶏、豚などたくさんおりました。私の役目は山田さんと浦井さんと三人で乳牛の乳しほりでした。生まれて初めての乳しほりで、私が腰掛けて乳に手を掛けると牛が嫌がって、バケツを蹴転がすことも時々ありました。

のんびり草を食べながら遊んでいる動物たちを見ると、かわいい顔をした牛馬ほど、ほかの牛馬に追われて苦勞をしていた。反対に醜い顔をしている牛馬ほど、だれにも攻められず、のんびりと尾をびんびんさせながら悠々と遊んでいました。大陸だからこそ見られる風景です。人間の心も大陸のように広くのんびり持たなくてはいけないと思いました。ちょうど海辺の石のようなもので大きな波に打たれては石と石がぶつかり合い最後は角のない丸い石になる。人間の心もそれと同様ぶつかりあってこそ、だんだんと人間がで

きてくるのだと思いました。

七月ごろになって時々、飛行機が飛んできては本部の周りに紙びらをまいて行くので、拾って見ると「外地に住んでいる日本人一人残らず叩きつぶせ」と書いてあった。日本人は今までだれにも恐れることなく暮らしていたのに、これは大変なことになった。日本の国は神仏の国で絶対に負けない国だと信じていたのに、まして外地にいてこれからどうなることかと不安な気持ちでした。

昭和二十年八月終戦間際になって、最後の召集令状がきて小桜さんほか三人の人が出征するとき、本部裏の小高い丘の上に登って成吉思汗駅に着くまで手を振って見送っていた。「おーい」と言うと、向こうも「おーい」と手を振った。戦争が終わったことも知らず、四人は駅のホームで汽車の着くのを今か今かと待っていたそうです。やっときた汽車は駅に止まらず素通りして行き、そこで初めてこれは少しおかしい、もしかしたら戦争が終わったのではないかと思つたそうです。本部では男の宮沢福松さんと女十五人、子供五

人だけ残され不安でした。

その晩から男も女も軍服を着て木銃を持って一晩に三回塹壕の外を匪賊がこないか見張るのです。壕の入口には狼に襲われないようにとたくさん火を燃やした。そして八月十五日、「一冬越せるほどの米、衣類などを馬車うまぐるまに積み、後は全部貯蔵庫に入れろ」と命令があった。なぜこんなことをしなければならないのか分からずに命令通りにした。

次の日、いつもと変わらず牛、馬、綿羊、鶏など全部野放しにした。夕方になっても帰ってこなかった。今にして思えば戦争に負けたことは日本人の私たちが満人たちの方が先に知っていたようでした。だから動物たちを放牧したら、ワツとたくさんの満人たちが集まってきて、全部連れ去って行ったのであろう。次の日、暴徒から避難するため本部の建物の屋根に石油をかけて火をつけた。アツという間に本部は火の海になりました。満人たちは待つていたかのようにたくさん集まってきて、農機具や品物を取りに火の中へ命懸けで飛び込んで行った。建物が全部燃えるのを確かめ

てから、荷物を積んだ馬車ウマクルマに女、子供を乗せて、成吉思汗開拓団まで五、六台で走らせた。

成吉思汗開拓団員と一緒にチチハルまで行こうと出発したのです。全く武器も持たない移動ですから、荷馬車に襲いかかるであろう現地住民から身を守るために、ソ連軍の監視付きでチチハルを目指して行進を続けたのです。

途中疲れたので道路の外に出て、一休みしたその一時間ほどの間にいつの間にか、私たちの周りに集まってきた満人たちの暴徒集団が、私たちの持っている荷物を馬車ウマクルマから奪い取ろうと襲いかかった。それを見て日本人は黙っておりません。護身用の手鎌などを使いながら、身と荷物を守るために満人たちに向かつて行つた。そのとき、成吉思汗警察署の若い警官が隠し持っていた拳銃を発砲したために事態が一転し、監視のソ連兵から無差別に銃撃され、新潟の杉田政雄さん、阿部修次さんが射殺された。二人の鎌先に血がついていたために、満人がソ連兵に「あいつは日本人の親方ビヤンサイだから殺せ」と言つたそうです。阿部さんはお

なかの大きい奥さんと一緒に鎌を担ぎ、肩を並べて私の五メートルぐらい後を歩いておられたのですが、急にボタンと倒れられた。つまり転ばれたのかと後を振り向いて見ると、ソ連兵が銃を向けていました。阿部さんを抱き起こそうとしてそばに寄ると、皆が「介抱すると夫婦と見られて殺されるぞ」と言つたので、そのままにして前の人より遅れないように肩を震わせ、振り向きもせず両手を上げて歩きました。少し歩いてそつと振り向いて見ると、暴徒の満人が阿部さんの着ていた衣類を剥ぎ取つていた。このとき、奥さんの気持ちはどんなに苦しかったことでしょう。とても仲の良い夫婦だったのに本当に気の毒でした。

そのときから全員着のままの避難民に変わり、毎日がまるで地獄のようでした。夜になって泊まる所もなければ食べる物もなく、雨が降って体が濡れても着替えもなく、ただ黙って両手を上げて二列に並んで歩くだけでした。腹はすいてくるし、足は疲れ夜になると草原の中の野宿です。満人の畑から野菜を盗んで泥付きのまま食べ、水は足跡に溜っている雨水をす

くって飲みました。

野宿しているときも頭の上を鉄砲の玉がびゅんびゅんと飛んできて、生きた心地もしない日々でした。まだ若かったからいつ死ぬのか、死んだらどうなるのかなど考える気力もなく、ただ茫然とした無遊病者でした。

松原さんの奥さんも生後一カ月の赤ちゃんを背負いながらの避難途中、一日目に赤ちゃんを亡くされ、道端に穴を掘り埋めました。ほかに子供は五人も亡くなりました。「日本の国は戦争に負けたのだ。一人残らず殺してやる。昔の仕返しだ」と言った。今、何を言われ、何をされても仕方がないと覚悟をしました。また、何か隠している物はないかと（途中で暴徒の満人たちに荷物は全部奪い取られ、何も持っていないのに）。ソ連兵は時計、お金など着ている物以外全部奪い取るために、女も男も一人一人裸になって検査をした。腹の大きい婦人は何か隠し持っているのではないかと、腹帯まではずして調べる。このような暴力に耐え、検査の終わった者に「向こうへ行つて集まってお

れ。一人一人殺すのは面倒臭い、機関銃で全員射殺する」と、通訳が伝える。私たちは一人殺され損なつたら大変だと服を脱いで、みんなより前に出て胸を張つて殺されるのを、今か今かと待ちました。ほかの開拓団の方で乳飲み子を持った若い母親は「最後の乳だよ、たくさん飲んでおくれ」と、念仏を唱えながら乳を飲ませている人もいました。

長い長い沈黙の時間が過ぎた後、ソ連兵は黙つて行つてしまった。現地住民でも「日本人は悪い人間だ」とロシア兵に言い付ける人もいるし、また「今まで日本人に助けられたから御恩返しをするのだ」と言つて、私たちがチチハルに着くまで、裏通りを案内してあげると親切な言葉を掛けてくれる人もいました。しかし日本人に親切にするとその人たちは悪い住民にいじめられる。どのようにして良いのか悪いのか、私たちは生きてもよし、殺されればなおよし、だれ一人として声を出す元気もなく、ただ歩けと言われれば歩き止まれと言われれば止まる。満人の畑に入れば殺される。途中、大きな川があり、渡し船があつても金がない。

着ている物を濡らせば着替えもなく、女も子供も全部裸になり着ていた物を頭に乗せ、背の高い男の人におんぶしてもらい川を渡りました。

六日目、野宿ばかりして疲れ果てていると、優しい現地住民が「今晚、私の家で粟粥を作って上げるから、たくさん食べてゆつくり体を休めてください。濡れた着物を乾かしなさい」と誘ってくれ、その上「明朝早く人通りの少ない間に裏道を案内してチチハルまで送ってあげる」と言うのです。地獄で仏とはこのことかとみんなで喜び、初めて今までの恐ろしかったことなどを語り合っていた。ところが夜中に通訳がきて「ソ連兵が今晚屋根に石油を掛け、全員焼き殺してやると言っている」と言うのです。皆びくびくしていたものの死ぬ覚悟は既にできているので、それほど動揺することもなかったが、結局こなかった。

夜明けと同時にチチハルまで送ってやるとの言葉を信じ出発しました。チチハルにはまだ日本兵もたくさん残っているのに違いありません。どうにかチチハルに着けばもう大丈夫、命だけは助かると皆思っていました。

チチハルの手前には嫩江のんこうと言う大きな川があり、今度は足で渡ることはできそうもない川です。「橋が掛かっているから大丈夫ですよ」と言われて付いて行くと、悪い現地住民が先回りして渡れぬように橋が一方所落とされていた。それでも親切な現地住民にお金になりそうな物を皆で出し合い「これで向こう岸まで渡してください」とお願し、どうにか船でチチハルの町に到着することができました。

日本の兵隊がいると思つて安心していたのに、終戦と同時に一人残らず、ソ連に連れて行かれたと聞いて皆がっかりした。団に最後の召集令状がきて成吉思汗駅で汽車を待っているとき、くる汽車くる汽車が駅で止まらず素通りして行つたが、その汽車でチチハルに残っていた日本兵みんなソ連に連れて行かれたと聞きました。

チチハルに避難した開拓団員全員が管林局の広い建物に入れられた。板の間で豊秋開拓団員全員一固まりになつていた。外に出ることも許されず、便所に行くだけでだれ一人話す元気もなく、恐ろしいと思う気分

さえなく、息をしているだけでただ茫然としていた。

満州にきて慣れない土地で見る物、することがすべて夢のようで、何かを思い出す方も残っていない。日本の敗戦を知らずチチハルに避難するときは、一冬越せるほどの品物を馬車に積み、残りを貯蔵庫に入れるとき、また団に帰れると思っていたが、家畜を全部満人に奪い取られ、本部の建物に自分たちの手で火をつけたそのときから、我が身であつて我が身でなくなり、恐ろしいとか、これからどうなるかとか考える気力もなく、夢うつつの世界をさまよっているような気分でした。

営林局にきてから朝食は九時半ごろで昼食はなく、夕食は三時半ごろ高粱飯のお握り一個だけ、おかずやおつゆもなく毎日ただそれだけで、もう疲れ果てて、男も女も話す元気もなく不安な気持ちだけでした。それでも避難途中、野宿して卓を食べながら恐る恐る両手を上げて歩いたときと比べれば、建物の中で食事が与えられるだけでも安心でした。負けた国の人間だと馬鹿にして、ソ連兵は夜になると毎晩のように強姦に

きました。自分たちだつてゲーペーウーに見つかれば銃殺されるのに、ソ連兵は鉄砲を持つて建物に土足で五、六人入つてくる。そのときから女性は男に見せ掛けるために髪を短くして、夜は男と男の間に寝たのです。それでも彼らは男も女も一人一人胸をさわつて女性を見つけていった。営林局に避難していた人は、皆恐ろしかったその気持ちは同じだったと思います。

豊秋の団では子供が少なく小さかったので、夜になつても静かで助かったが、ほかの団では年寄り、子供が多かったので、一晩中「お母ちゃんこわいようこわいよう」と泣くのです。泣けばあそこに女がいると言ふことがすぐ分かるので、旦那の前であろうが構わず、一人は鉄砲で威嚇しながら番をし、代わる代わる「今度は俺の番だ」といたずらをして行きました。それどころか一晩中、連れ去られる娘さんもありました。

一晩中恐ろしくて外の便所へも行けず、枕元に洗面器をおいて、音をたてないように、毛布をかぶせ見張りをしてもらいながら用を足しました。まるで生き地獄のような生活が二カ月余り続きました。避難民にな

つてから一人に一枚ずつ毛布が支給されましたが、満州では十月末ごろになるととても寒くて眠ることができません。このままではこの冬の間、全員凍え死にしてみようと思いました。

チチハルの町には終戦前、多くの日本人が住んでいた、日本人の経営していた旅館などに分かれて住むことになり、日の丸旅館には豊秋開拓団、成吉思汗、青山、興山と四つの開拓団が住むことになった。豊秋は八畳二間で山本和夫さん、小桜さんの二人は離れの六畳に寝起きしていた。旅館にきてからもやっぱり朝夕二食で高粱飯のお握り一個ずつでした。夜になると六人で毛布を一枚下に敷き、五枚を上にかけて寝ても寒い。明け方には天井に氷が張っていた。毛布にくるまっても寒くて眠ることもできず、一晚中横になって前の人の背中をマッサージをしていた。栄養も取っていないし、眠ると凍死するかもしれないと思い、今ごろは内地で何を食べているのかなあ、どんな歌が流れているのかなあ、若い二十代の人ばかりで、何をするともなく大きな声で一日中、歌を歌って励

まし合っていました。毎日顔も洗わず、お風呂にも入ることなく、着のみ着のままの不潔な生活なので、髪の毛や衣類に虱しゅうみがわき、昼は虱つぶしが日課でした。旅館にきてからもソ連兵が土足で強姦に入ってくるので、男たちは女どもがいるから俺たちまで恐ろしい思いをしなければならぬと言うようになった。夜になると床上でさえ寒いのに縁の下で寝ることもあった。

日がたち内地に帰る見通しもたないもので、各団から一人ずつ炊事当番に出ることになった。毎日遊んでいても一日、高粱飯のお握り二ツでは腹がすいて、夜中にこっそりバケツを持って炊事場へ飯の焦げ付きを盗みに行つてくると、みんな手をたたいて喜んだ。外に出ると銃殺されるか、強姦されることが分かっていても腹がすいて眠れず、満人の豆腐屋の外に捨ててあるオカラをバケツにいっぱい詰め込んできた夜は、頬がゆるみ、みんな分けて食べました。大人は我慢できず、子供たちは何も分かっておらず、毎日高粱のお握りだけでおやつもなく、本当にかわいそうでした。

終戦後日本に引き揚げてくるとき、満人に預けてお

いて我が子を連れ戻しに行ったら返してくれず、仕方なく一人で日本に引き揚げてきたなど、肉親探してよく聞きます。本当の心を知るにはどん底に落ちて見ないと本心が分かるはずはありません。ほかの開拓団のお母さんが背中に一人子供を背負い、二人の子供の手を引きながら、皆と一緒に二列に並んで歩いていたが、手を引かれていた子供が痛い腹がすいたと言って歩こうとしなくなり、だんだん前の人より遅れてくる。後方ではソ連兵が銃を構えている。するとそのお母さんは一人の子の手を放しました。後から満人たちが鎌などを持って追ってきて、列から遅れたその子供をつかまえ、「俺の子だ」「俺の子だ」と子供の奪い合いをしていました。子供は大声で「お母ちゃん待って！」と繰り返して泣いて呼んでいるが振り向きもせず、列から遅れまいと歩く。そのうちまた足が痛い、腹がへつたとむずかる残った一人の子供の手を放し、最後は自分も疲れ果て背負っていた子供も放し、我が身だけチチハルに着いた人もいました。

日の丸旅館に入ってから満人が日本の子供は頭が良

くてよく働く、女の子は三千円、男の子は二千円と買いにきました。働きたくても働き口もなくもちろん金もなく、我が身一つでも生きるのがやっとなのに、子供は遠慮気兼ねがありません。大人は我慢するけれども子供は我慢ができません。腹がすいたと言っては親を困らせる。内地に帰る見通しもなく、それなら子供を満人に売れば自分も良いし、子供も良いと心を鬼にして売った人も少なくないと思います。

そのころ満人の家へ働きに行っても一日十円でした。日の丸旅館に入って間もなく松原さんが帰ってこれました。「戦地で一緒だった米山君は、私の目の前で戦死したよ」と聞かされました。主人とはたった二カ月前の結婚生活でした。今は我が身も明日も分からない命でしたので、ただそうでしたかと言っただけでポイントとしていました。松原さんは帰ってすぐ奥さんと二人、町の日清薬房で暮らしておられ、内地に引き揚げるときは別でした。笠原さんもチチハルの町で知り合いの白系ロシア人の家へお手伝いとして行かれ、幸せそうでしたが、引き揚げるときは別でした。

私も日本人会からのお世話で、食べるために九州の方で旦那様が病気で小さい子供が二人いる日本の家へお手伝いに行きました。一カ月目に旦那様が亡くなられ、帰りに奥様から白いネルの布をいただきました。その布を十五人の女たちに同じように切つて分け、月々大事に使いました。

日がたつにつれ、だんだん治安も良くなり、それでも男たちは外出は許されず、女たちだけ許されたのです。難民でありながら豊秋の人たちは朝から晩まで歌ばかり歌っていたので、歌うほど元気な者には食事は与えないことになった。内地に引き揚げる見込みはないから、自分で働いて食べて行けと言ふことになったのです。

それからは自分で仕事を探し、食べて生きて行くためにほんのな所へでも命懸けで行きました。満人の家の洗濯、豆腐売り、饅頭売り、新聞売り、風呂屋の掃除、食堂ガール、最後は日本人の経営するびー屋、日本語で言えば女郎屋にまで入れられるところでした。北九州の人ですが、終戦時までチチハルの街で旅館を

経営していたそうで、部屋もたくさんあることからそれを改造してびー屋をしようと考えたのです。「この旅館に若い女たちが揃っていると聞いて、お願いにあげりました。住み込みで若い人六人ほしいのです。仕事の内容は、ただお客様にサービスするだけの無理のない仕事です。内地に引き揚げるまで責任持つてお預りいたしますので御安心ください。家にきていただければ毎日、白いお米の御飯を腹いっぱい食べさせてあげます。それにお風呂は毎日入れます。お化粧をしてきれいな着物も着せてあげます」と言われてもびんときない私たちでした。

毎日、恐る恐る満人の家へ行って仕事をする事もなく、日本人の家で六人一緒にいられるし、地獄で仏とはこのことかと大喜びでした。しかも、日本人同士ですからだまされるなどは夢にも思っていない。奥さんが迎えにきてくださって私たち六人は喜んで歩いて行きました。大きな旅館の一室に通され今の名前ではなく、好きな名前に変えましょうと言われ、私は「スミエ」に変えました。そして「貴女たちの仕事は

無理な仕事ではなく、ただ、きていただいたお客様に嫌な感じさえ与えなければよい。一人で三部屋掛け持ちすることただそれだけのことで」と言われても、まだびんときていない私たちで、「戦争に負けた国の人間だもん生きて行くためには我慢して、満人のお客様でも酒の酌ぐらいはしなくちゃね」と、深く考えはしなかった。

外はだんだん暗くなってきた。そのとき、もう若い満人二人がきて私たちのいる隣の部屋で奥さんと満人二人はけんかするような、どなり声で言い争っている。耳をすまして聞いていると奥さんは「姑娘たちと約束したから、今晚は絶対に駄目、明日出直してください」と言っている。満人は「明日、朝早く遠くへ行かなくてはならない。今晚も明日も同じではないか」と、だんだん声が大きくなってきた。この期に及んでやると私たちは日本で言う女郎屋だと気がきました。これは大変なことになった。同じ国の人が私たちを食いつくすとは信じられなかった。着のみのままだからすぐ逃げ出すことを考えた。

街の満人たちは近くのキリスト教会の鐘の音と同時に行商を始め「チェゴ、チェゴ、マントー、マントー」と、瞬く間に人がたくさん出てくる。それより先に逃げ出さなくては大変なことになる。女将は私たちに感付かれたと思ったのか、「今夜はあなたたちと一緒に休みたい」と言ったが、「約束が違います。明日からは言われるとおり働きますから今晚だけは私ただけにさせてください」と言う、女将は安心して隣の室で寝たようでした。私たちは一晩中眠りもせず、どこからどうして逃げようかと考えました。結局、便所の小窓から逃げ出すことに決めた。朝早く皆で洗面所へ行くように見せかけ、歯みがきを持つやら歯ブラシを口にくわえるやらして、窓から先に出た者から引っ張ってもらうやら、尻を押してもらうやらで外に逃げ出した。ちょうどその時、教会の鐘が鳴り出した。同時に満人たちの行商が始まった。汚い身なりそのまま履物を手に持ち、人通りの少ない裏道を一日散に日の丸旅館に逃げ帰りました。

次の日、女将は悪いことをしたとは言わず「旅館を

改造するのにたくさんの金も掛けていることだし、一人のお客もとらずにこんなことになって、主人はショックで耳が聞こえなくなり、お願いだから気を持ち直してきて欲しい」と言いにきました。乞食のようなその日暮らしでも、皆と一緒の生活の方がよいからとはつきり断った。その後も戦争に負けた国の人間だからと馬鹿にされ、どこへ働きに行っても二日と続かなかつた。

阿部さんの奥さんは、避難途中、旦那さんが銃殺され、日の丸旅館にきてからお産をされたが、赤ちゃんは生まれて間もなく亡くなり、その上、風邪で高熱が続き、毎晩毛布の中から足を出して寝ておられた。そのせいか足の指が凍傷になり、とうとう指十本全部取れてしまい本当にかわいそうでした。日本に引き揚げて間もなく亡くなられたと、新潟の人から聞きました。日の丸旅館にきてからも不潔な生活で、発疹チフス、天然痘、赤痢、麻疹、栄養失調などで、豊秋の岡本先生のお母さんと子供たち四人とも、連れを誘うかのようにならなくなり、人が死んでもお葬式もな

く、ただスコップを持って近くの龍沙公園の砂場に埋めるだけです。病気になっても医者にも診てもらえず、葉もなく弱い者から死んでいきました。

隣の部屋に親子連れが避難していた。最初、母親が栄養失調で亡くなり、父親は母ちゃんが死んで子供四人をどうして育てていこうかと、おいおい泣いておりました。それから二日目、今度は父親が亡くなり、また、二日目お姉ちゃんが、次に下の弟がと十日間で四人、皆、栄養失調で声もなく静かに死んでいきました。一番上のお兄ちゃんと下の四歳ぐらいの男の子二人だけが残って、仕事に出掛けるにも子供がいて出掛けられず出掛けなければ食べてはいけず、本当にかわいそうでした。

治安も大分良くなったある日、二、三人で龍沙公園へ散歩に行く途中、満人のお葬式に出会った。金持ちの葬式なので寝棺でしたが、両方の手の部分だけ穴を明け、そこから開いたままの手が出されているのです。お金をたくさん持っていても持つて行くことはできないと言ふ意味だそうです。泣く人を頼みたくさんいる

ほど良い葬式だそうです。たくさんの泣人が鼻をたらしながら「アイヤ、アイヤ」と大きな声で泣きながら、棺の後を歩いていました。

ある日、スパイを働いた外人二人と日本人一人が町を回り、最後は龍沙公園で銃殺すると言いふらしたので外に出て見た。さすがに日本人は顔を上げ、堂々と胸を張って歩いていた。外人二人は泣きながら下をうつむいたままでした。最後は公園の高い所に立たせられ、一緒に「ドン」と銃殺された。私はどんなことが日に入っても、自分も今日一日、明日の命もあるかなにか考える余裕もなく、ただぼんやりと見ていました。

自由に町へ出られるようになり、道端に立つて新聞売りをした。ネクタイを締め頭の良さそうな人がきたので、新聞を差し出すと「オーデ・ノウテン・ホワイラ・プロブヨ」と言っただけです。次に豆腐売りをしたが、ただ重いバケツを持って歩くだけ。だれも買ってくれず、結局、恐ろしくても満人の家に仕事に行くよりほかになく、生きて行くためには恐ろしいとか、恥ずかしいとか考える余裕もなく無我

夢中でした。終戦前から富拉爾基の病院へ結核で入院していた猪浦進さんと篠原重雄さんが、旅館に帰ってきました。二人とも青白い顔して咳ばかりしてかわいそうでした。

芳村さん母子は一緒の部屋で栄養不足で体が弱っている上、弘子ちゃんはまだ小さく、病気が感染するから、と氣遣っておられた芳村さんも、弘子ちゃんを背負いながら包米マントー（中国の饅頭）を売り歩かれたが、満人の旦那（ジャングイ）たちが同情して買ってくれたそうです。

乞食のようなその日暮らしをしていた九月初めごろ、突然、日本人全員は内地へ引き揚げると言うニュースが入った。皆は夢ではないかと飛び上がって喜びました。夢にまで見た内地へ引き揚げる日、男女ともに真っ黒い顔をして汚い服装で手に汚れた南京袋のような荷物を持ち、チチハル駅まで二列に並んで歩きました。日本の土を踏むときはどんな気持ちがあるだろうか、今ごろ実家で何を食べているのだろうかなど、もう内地に着いたような気分になったものでした。今まで腹

がすいた、すいたばかり言っていたので、小桜さんが内地に帰ったら、何より先に南京袋にいっぱいポーミファを食べると言ったので、皆初めて腹の底から大きな声で笑った。

引揚者はチチハル駅から錦州のコロ島まで屋根のない貨物列車に乗せられた。雨が降って体が濡れ、汚い身なりがなお汚く哀れなものでした。でも、内地に帰れる嬉しきで子供のようにはしゃぎました。今思い出して見ると、人間を乗せた汽車と言うより豚を積んだ貨車だった。コロ島から船に乗るとき、コレラ菌を持っていてる者はいないか検査したが、コレラ菌を持っている者もなく船に乗ることができました。途中、船中で一人亡くなられた人がいて甲板の上から海へ投げました。博多の港に着いてから、またコレラの検査をしたところ、一人見つかり、そのため、なかなか上陸できずいらいました。

昭和二十一年十月四日、夢にまで見た日本の地、博多の港に上陸することができ、夢見ているようで何度も自分のほっぺをつねってみた。白いお米のお握り一

ついただいたとき、どんな味がしたやら、どこをどう通っていったやら覚えがなかった。一度でよいから日本の土を踏んでから死にたいと思い、話し合っていたその土を、今自分の足で踏んだのです。ああ、これで死んでもよいと思ったものでした。

博多駅でしばらく休んでから「皆さん大変ご苦労様でした。体に気を付けてまた会いましょう」の一言で、笑顔でそれぞれの故里に向かって汽車に乗り、我が家へと去って行きました。

渡満したときの気持ちは親孝行のつもりで、結婚して大陸に骨を埋める覚悟で家を後にしたのに、戦争のためわずか二年足らずで大を失い、こんな乞食のような姿になって、家に帰るのが情けなくて足が重かった。今後どうして生きていけばよいのやら、避難生活のときの苦しみ以上に頭の中は一瞬、熟した柿が地面にぐしゃっと落ちてつぶれてしまったようなそんな気持ちでした。

昭和二十二年翌年、娘のころに勤めた経験を生かして、日東紡に入社しました。勤めて一年余り過ぎたこ

る戦死した夫の公報が入りました。それから二年余り過ぎたある日、突然の便り一通が深い縁で、避難生活を共にして苦しみを乗り越え生きぬいてきた小椋家へ、二十四年十月に嫁いだのです。お陰様で男の子二人の子持ちとなり、次男は近くに分家させ、現在長男夫婦と幸福な日々を過ごさせていただいております。

主人には大変な苦勞の掛け通しでした。親の義務を果たしこれからと言うとき、平成二年五月十一日病気で亡くなりました。

忘れようにも忘れられない、五十年前の地獄の一年二カ月間の避難生活、今になって思い出して見れば若かったとは言え、栄養も取れていない着のままの不潔な生活の中で、伝染病にもかかわらず、腹痛も起こさず、風邪も引かずに生きぬいたと言うことは欲気がなく、考えることなく、息だけしている生き方だったことだと思っています。避難生活では若いとか、年寄りであったとかでもなく、恥ずかしさを思う気力もなく、ただ一日がなるようにしかならない毎日で、生きるも良し、死ぬも良し、だからこそ夢にまで見た日

本の土を踏むことができたのだと思っております。

ただいまも生かさせていただき、これからも生きるためにはいつまでも、避難生活のころの気持ちを持ち続けることこそ、人間として一番の生かされる道だと言うのです。人間はなぜこの世に生まれてきたかと言うと御仏の心を聞くために生まれさせていただいた。どうして生きているかと言うと仏にさせていただくためにと言う。なかなか生まれ難い人間世界に生まれさせていただき、人によっては経験しえない楽しみ、また、苦しみに遭いましたが、長いようで短かった私の人生は、最高だったと感謝しております。

長い、長い夢でも見ていたように感じ、私は苦しみがあつたならばこそ、こんにち今日の幸福を、感じる事ができるのだと思っています。

【執筆者の横顔】

トミ子さんは、富山県の入善町の農業小堀家の十人兄弟の下から三番目で、大正十二年十月に生まれた。

両親は厳しく、また優しく育ててくれたので兄弟は

みな仲良くむつまじい家庭の環境であった。

昭和十二年に父親が亡くなったので、母親は大変な苦勞が多かったが、兄弟みんな母に協力していた。

昭和十九年にトミ子さんは米山家に嫁いで、二十年一月に満州大陸の成吉思汗駅に着いて義勇隊頭道班に落ちついた。満州人の親切さに接して満州にきてあまりの幸福に、つい内地の肉親のことも忘れかけていた。五月七日、突然、豊秋開拓団は六人の男の人を残して主人の米山氏も共に召集令状で応召となった。

子供のいないトミ子さんは身軽なので、多くの難行苦行の開拓団家族を手伝って立ち働いていたが、閉本部からチチハルまで避難する。歩行の困難は言語に絶するもので、腹はすいてくる。足は疲れる。夜になると満人の畑から野菜を盗んで泥のついたまま食べ、水は足跡にたまっている雨水をすくって飲み、野宿している頭の上を鉄砲の弾丸が飛ぶ、生きた心地がしない日々の連続であった。

ハルビンで召集解除となって帰ってきた松原さんから「奥さんに気の毒ですが、奥さん、米山君は、私の

目の前で戦死した」と聞かされた。トミ子さんは一瞬目の前がまっくらになった。御主人とはたった二カ月間の結婚生活であった。今は我が身も分らない命であったので「そうでしたか」と言う言葉しか出なかった。

昭和二十一年九月、日本人全員日本に引き揚げるユースが入り、コロ島より乗船、十月博多港についた。現在、生かさせていただき、これからも生きるためには、避難生活をしていたころの気持ちを持ち続けることが、活かされる道だと言う。生まれ難い人間の世界に生まれさせていただき、人間として楽しみ苦しみに遭う、小桜トミ子さんの人生達観ここにある。

(被引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)